ISSN　2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた
教育史研究を求めて

第53号　2019年5月15日

編集・発行　『月刊ニューズレター　現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人　冨岡勝・谷本宗生）
連絡先　　大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部　冨岡研究室
e-mail:　tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム　学校資料の教材化を模索して ー集合写真の活用を事例にー	八田 友和	2
逸話と世評で綴る女子教育史(53)　―女流小説家の登場―	神辺　靖光	5
大段政春（理学博士、東京帝国大学）写真帳を手にして ―戦時実験研究中の爆発事故死、大学理学部葬―	谷本　宗生	10
明治後期に興った女子の専門学校(8) 明治女学校の終焉	長本　裕子	12
教育史研究の周辺⑫ 学校を経由した社会移動研究（再生産戦略編④）	加藤　善子	17
カレッジノベルの研究への道(5) ：日本の研究に見るカレッジノベル（1）	吉野　剛弘	20
戦後生徒会活動成立史の研究 ① ―なぜ生徒会活動史を扱うか―	猪股　大輝	23
学生・生徒「自治」の教育史研究で何をやりたいのか	冨岡　勝	27
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（18） ―全国大学史資料協議会 HP「大学史資料所蔵機関紹介」―	田中　智子	33
体験的文献紹介(1)　―近世儒学史の文献―	神辺　靖光	38
刊行要項（2015年6月15日現在）		42
短評・文献紹介		43
会員消息		45

コラム

学校資料の教材化を模索して
―集合写真の活用を事例に―

八田 友和（はった ともかず）
（クラーク記念国際高等学校）

1、はじめに

2019（平成31）年に文部科学省が発表した「平成30年度廃校施設等活用状況実態調査の結果[1]」によると、2002（平成14）年から2018（平成29）年までに7583の学校が廃校となった。それに伴い、学校が所蔵する資料（以下、学校資料）が散逸と廃棄の危機にさらされている。学校資料を保存し、後世に伝えるためには、“次の世代に受け継ぎたいモノ”という気持ちを子どもたちが育むことが重要である。そのためにも学校資料を授業をはじめとした学校教育のあらゆる場面で積極的に活用することが求められている。

以上を受け本稿では、学校資料のうち“集合写真”を取り上げ、授業での活用方法の模索を行う。

2、集合写真の教材化

図1 宮島小学校入学写真
(出典)『学校のあゆみ美山地区編』

図2 宮島小学校卒業写真
(出典)『学校のあゆみ美山地区編』

多くの学校が所蔵している学校資料として“集合写真”が挙げられる。学校によって場所は異なるが、校長室や応接室、玄関などに掲示されていることが多い。一般的には、入学式（図1）や卒業式（図2）、修学旅行などの式典や行事に撮影されることが多く、卒業アルバムなどに掲載されることが多い。

それらの資料を活用する方法として、例えば、撮影時期の異なる集合写真

を複数枚用意して、時系列に並び替える活動を授業に組み込むことが想定される。これにより、児童の人数の変遷から、少子化をはじめとした人口問題について学習できるのではないだろうか。加えて、補助資料として、統計データを示すことで、児童数の移り変わりをより正確に把握させることも可能である。ここでは、具体例として、『学校のあゆみ美山地区編(南丹市立文化博物館編)』の巻末に記載のある、1947(昭和22)年から2015(平成27)年までの「児童数の変遷」のデータを基に図3の作成を行った。

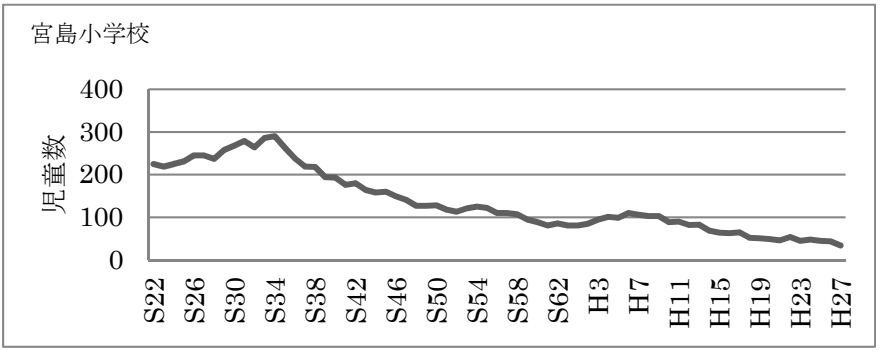


図3　宮島小学校の児童数の変遷(出典:『学校のあゆみ 深山地区編』pp.52-53を参考に筆者作成)

図3のグラフを活用することで、集合写真から読み取った児童数のおおよその変化を、より緻密なデータを基に再確認することができる。加えて、図1から、1947(昭和22)年から爆発的な児童数の増加(第一次ベビーブーム)が起こり、その後、若干の増減はあるものの、徐々に生徒数が減少していくこと(少子化)も読み解くことができる。それとは別に、近隣地域の児童数の変遷を、学校沿革史や閉校記念誌などから調べさせ、折れ線グラフを作成し、複数のグラフを比較する学習も想定される。例えば、宮島小学校の近隣に立地する園部小学校では、昭和20年代に人口が急激に増加し、昭和39年以降の児童数はほぼ横ばいで推移している。しかし、平成16年以降は若干ではあるが児童数が増加していることが読み取れる(図4)。また、グラフからは読み取れないが、1999(平成11)年には、園部第二小学校も開校しており、児童数は増加の一途をたどっている。

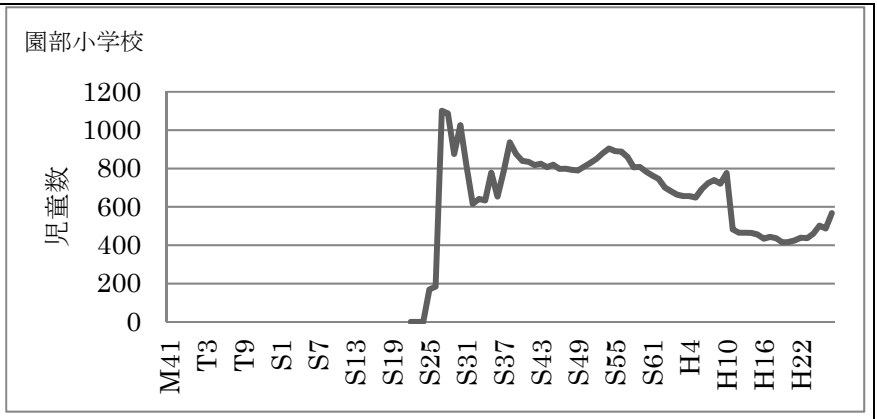


図4　園部小学校の児童数の変遷(出典:『学校のあゆみ 園部地区編』pp.44-45を参考に筆者作成)

このように、同じ地区にある小学校の児童数の推移を比較することによって、1つの地域を事例にベビーブームや少子化をはじめとした社会的事象を多角的に読み解くことができる。また、集合写真だけでなく、航空写真の推移と変化を見ることによっても、児童数の増減を読み解くことができると考えられる。

3、さいごに

本稿では、集合写真を事例に具体的な活用方法の模索を行った。学校資料はその資料単体では授業において活用しにくいものが多い。しかし、統計データや各種資料を参考に“補助資料”を作成し、活用することで、教材としての価値を最大限に発揮させることができる。今後の展望としては、実際に授業実践を行うなかで、本稿で述べた教材化の視点が有効に作用するのか検証を行いたい。その際、学校資料を専門的に調査・研究している研究者の協力が有効な方策となる。よって、研究者と教員が立場や職業を架橋した、学際的な研究や協力を行う必要があり、そのような協働体制の構築を図りつつ研究を深化させていきたい。

【註釈】

1)…文部科学省2019年「平成30年度 廃校施設等活用状況実態調査の結果」

【参考文献】

・村野正景・和崎光太郎(編)2019『みんなで活かせる! 学校資料-学校資料活用ハンドブック-』学校資料研究会
・南丹市立文化博物館(編)2015『学校のあゆみ 園部地区編』
・南丹市立文化博物館(編)2017『学校のあゆみ 美山地区編』

逸話と世評で綴る女子教育史(53)
―女流小説家の登場　―

神辺(かんべ)　靖光(やすみつ)（ニューズレター同人）

閉ざされた家の中から開かれた社会へ活躍の舞台を拡げた女性たちを上流階級から芸人に至るまでみてきたが、姿を街頭に現わさないまでも書物を通して大衆の耳目を引いた女流小説家も見落とせない。

これまでも歌を読み書きする女流歌人や意見を認(したため)める女性はいた。しかし、近代にはじまった街談巷説をリアルに綴る小説家はこの時期になって現われたのである。その第1号は木村曙であろう。

木村曙(きむらあけぼの)の小説『婦女の鑑』は明治22年の「読売新聞」に連載された。橋爪秀子という才女がアメリカに留学して親友や意地の悪い友人たちにもまれながら成長して大学を卒業し、帰国してから工場を起したり、幼稚園をつくって貧民の子供を導いたりする話である。木村曙（本名えい子）18歳の時に書いたもので、少女の作品であるからたいしたものではない。しかし漸くはじまった言文一致体で書かれている。彼女は東京芝の富豪・木村荘平の娘で東京女子師範学校付属高等女学校の出身である。自分をとりまく環境、その時代の雰囲気を材料にこの小説をつくったのであろう。このあといくつかの小説を書いたが注目されなかった。明治23年10月、18歳で亡くなった。

明治23年8月から25年1月にかけての『女学雑誌』に若松賤子の『小公子』が連載された。『小公子』はアメリカのF.E.Burnett

の“Little Lord Fauntleroy”の訳である。『小公子（前編）』は24年、女学雑誌社から、全訳は30年、博文館から刊行された。父をなくし、母とニューヨークの裏町で暮らしていた少年セドリックがイギリスの貴族である祖父ドリンコート侯爵家を継ぐことになり、イギリスに渡り、偏狭な祖父と暮らすが、セドリックの無邪気な愛情によって祖父の心が次第に変化するさまが感動的に描かれている。明晰な言文一致体で訳されていて、森鴎外や坪内逍遥らに名訳と絶賛された。

若松賤子

『小公子』の表紙
（明治 30 年 1 月、
博文館）

若松賤子は会津藩藩士松川家の生まれ、横浜の織物商大川甚兵衛の養女となり、ミスキダーの学校（フェリス和英女学院）に入学、15年、フェリス和英女学校高等科を卒業、成績優秀のため、直ちに母校の英語教師になった。明治22年、明治女学校教頭で『女学雑誌』主筆の巌本善治と結婚、フェリスを退職し、明治女学校の経営に参画しながら『女学雑誌』に翻訳や随筆を発表した。『小公子』の発表後もいくつかの小説を翻訳し、26年には小説「ひろひ児」を発表したが、29年の小説「おもいで」が絶筆となった。総じて当時の封建的な家庭生活に西欧のキリスト教精神による近代性を融合させようとしている。

明治27年5月から29年4月までの2年間に樋口一葉は「大つごもり」「にごりえ」「たけくらべ」などの小説11編を執筆発表した。「大つごもり」は富裕な山村家に雇われたお峯という少女が盗みを犯さなければならなくなった苦しい胸のうちが描かれている。やっと宿下りの許しを得たお峯は病床の伯父から2円の金策を依頼される。山村家の御新造はお峯の依頼を一たん承知するが、大晦日に継子の石之助が年越しの金をむしり取るために帰宅すると機嫌をそこねて知らぬ顔をする。大晦日で伯父の使いの子どもがくると進退きわまったお峯は御新造の硯箱にあった20円の札束から2円を抜き取り、使いの子どもに渡す。お峯は罪の発覚を覚悟するが、意外にも硯箱の札束は消えていて引き揚げた継子・石之助の受取書一通が残されていたという話である。お峯の「神さま仏さま、私は悪人になりまする。成りたくは無けれど成らねばなりませぬ」という嘆きが胸を打つ。

樋口　一葉

「にごりえ」のヒロインは銘酒屋「菊の井」の看板酌婦のお力である。愛人だった源七はお力に金を注ぎ込みすぎて落ちぶれ、源七の妻子からお力は「鬼」と呼ばれる。なぜ自分はこのようなことをしているのか、最近店にくるようになった朝之助に身の上を打ち明ける。その後、物語は急展開して源七とお力は心中する。お力の少女のときからの悲運に読者は胸を塞がれるのである。

「たけくらべ」はよく知られている。一葉が明治26年7月から下谷龍泉寺の長屋で一文菓子屋をたてたその土地での見聞をもとにした小説である。吉原に近い大音寺門前のにぎわいを背景に思春期の少年少女のほのかな恋をえがいて一葉一代の傑作とされている。「われ縦令世の人に一葉崇拝の嘲を受けんまでも此人にまことの詩人という称をおくることを惜まざるなり」と森鴎外は讃辞を贈っている(「めざまし草」の「三人冗語」)。

文芸倶楽部第 2 巻第 5 号　所載『たけくらべ』さしえ

樋口一葉は甲斐山梨郡の農家の出身であるが、父が江戸へ出て町奉行同心の株を手に入れ武士の身分になった。幕府崩壊後は東京府の官吏になったが、一葉の学歴は小学高等科第4級に止まる。明治19年、15歳の時、中島歌子の歌塾萩の舎で「源氏物語」「古今和歌集」などの平安朝文学を学んだ。明治22年頃、父が事業に失敗して病死、23年、本郷菊坂に女世帯を構えて針仕事や洗い張りで暮らしを立てつつ、「東京朝日新聞」の小説記者・半井桃水に師事して小説を書きはじめる。一葉は桃水を恋い慕うが、萩の舎で二人の関係がスキャンダルとなったので離別、やがて「文學界」の同人たちと交流して新しい文学に目覚めていく。

一葉の文章は文語体である。しかし古めかしさは感じない。当時の市井の人々の話し言葉がちりばめられていて臨場感があるし、リズミカルだから読み進められる。市井のかなり下層の人々が登場し

ても下卑た感じを抱かせないのは学んだ王朝文学の香りが身についているからであろう。

木村曙も若松賤子も近代的な女学校教育を受けている。若松賤子の翻訳小説はフェリス女学校での語学学習を抜きにしては考えられない。樋口一葉は女学校こそ出ていないが、萩の舎で学び、また「文學界」の若い気鋭の文学者と交わって影響を受けている。彼女ら自身の天賦の才能が新しい小説を生み出したのであるが、明治初期以来の教育や文化がまたこれらの才女を育てたとも言えよう。

参考文献　木村毅『文明開化』
伊藤整『日本文壇史』2、3、4巻
若松賤子『小公子』
樋口一葉『大つごもり』『にごりえ』『たけくらべ』

大段政春（理学博士、東京帝国大学）写真帳を手にして
―戦時実験研究中の爆発事故死、大学理学部葬―

谷本（たにもと）　宗生（むねお）（大東文化大学）

このたび、古書店（泰成堂書店）より大段政春（理学博士、東京帝国大学副手、死後に助教授昇進）の「思ひ出」写真帳（旧蔵：今堀和友か）を入手することができた。大段は、第一神戸中学校、第一高等学校理科乙類、東京帝国大学理学部化学科を卒業し、東京帝国大学理学部の水島三一郎教授のもとで副手となり、1944年8月15日に大学研究室で戦時実験研究中に爆発事故死（享年23歳）する。彼の死後、大学側は大段を助教授に昇進させ、理学部葬をとり行うのであった。

＜副手時代の大段＞

大段は理学部の副手として、海軍からの依託研究である電波探知機の高周波絶縁材料（高分子絶縁体ポリイソブチレン）の製造研究に従事していたのである。恩師の水島教授は、彼の死後、「われわれとしてはただ故人の遺志をつぎ彼の研究を更に発展させて一日も早くこれを戦力化する以外に何物もない…大段君の殉職はいろいろの問題を提起しているが、何よりも純粋科学そのものが力強い戦力であることを身をもつて示したことを忘れてはならない」と力説する。大段の爆発事故後、水島研究室では彼の研究を若手研究者らで継続し、分溜するという簡単な操作で原料イソブチレンから、分子量20万程度の高分子重合体を容易に製造できることを究明したのであった。これを受けて、海軍の命で四国の住友化学新井浜工場にて、高分子量のポリイソブチレンの大量生産を始めることになったという。

1944年8月29日、青山斎場にて大段博士の東京帝国大学理学部葬（参列者400名以上）が執行される。文部省側も、故大段を「戦時下特に緊要なる重要兵器材料に関する研究実験中遂にその職に殉ず、これ実に学術研究の使命に対し一身を犠牲とせるものにして学府に職を奉ずる」とし表彰した。

＜大段政春の墓＞

水島研究室の出身で、一高時代からの大段の親友と称する今堀和友（生化学者）は、自分も「その友を失った私の悲しみは言語に絶するものがあった」が、「水島先生の胸中の傷はこれをさらに超えたものであったと想像される。先生はその後もこの事件については口を閉ざされたままであった。これが契機で輻射線化学研究所が出来たとき、口さがない人が『焼け太り』とか何とか悪口を言っても、一切弁明されなかった。しかも大段君の母上をその最後まで面倒みておられたことを知る人は極めて少ないほど、秘かにその責任を取っておられた」と後年証言している（『回想の水島研究室　科学昭和史の一断面』1990年、103頁）。

故大段の母親は、皆の前では気丈に振る舞っていたというが、大学での戦時実験研究にわき目もふらず没頭していた息子（大段政春）を生前に心配し、彼にときに声をかけたこともあったが、大段は「そのうちきつと分かりますよ」と母親に心配をかけないよう返答したとする。したがって、「家では決して研究のことには口を触れず私も聞かうとしませんでした」と、母親は述べている。当時の新聞報道によれば、彼が13歳の折、神戸の鈴木商店勤務であった父親と死別し、その後母親と2人で生活をして来たのだという。彼の戦時研究への拘りについて、母親はその事情を「昨年徴兵検査を受け体の関係で入隊できず、ほかの友人の方々が揃つて陸海軍の部隊へお入りになつた際もひどく心になにか思ひ決していたやうでした」と触れている。

明治後期に興った女子の専門学校（8）
明治女学校の終焉

長本（ながもと）　裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

明治女学校は、明治30年2月、東京府下の北豊島郡巣鴨村字庚申塚に5600坪の広大な土地と2階建の西洋館・日本家屋120坪を桜井勉（木村熊二の兄）から購入し、4月に移転した。

『女学雑誌』459号（31年2月10日）の義捐金募集広告の中で、明治女学校第二期の教育方針として二つの目標が掲げられた。一つは、少人数で、生徒数が多い女学校ではできない家庭及び修己の鍛錬に重点を置く特殊の普通教育を施すこと。もう一つは、十年来実施してきた高等科の教育をさらに拡張して、高等女学校卒業後の有志に学修させる課程を備えて、女子大学の地位に到達させることであった。

作家野上弥生子（旧姓小手川ヤエ、後に夏目漱石門下の野上豊一郎と結婚）は、33年4月、14歳の時大分県から上京して入学した。晩年87歳から自伝的小説『森』に明治女学校時代のことを書き始め、あと数章というところで100歳の誕生日を目前にして亡くなり、未完のまま絶筆となった。『森』から概略しよう。

野上弥生子『森』
新潮文庫

「ひっそりとした古街道を進み、森が奥深く続いている所に学校はあった。しかし、校門もなければ、校名をしるした看板

も見あたらない。入って行くと、白い別荘ふうの洋館、もう一棟南京じとみを栗色に塗った二階家が並んでいた。その頃は全校生を集めても数十人だったが、岡野校長（巌本善治がモデル）の月曜日の道話は、2階の10畳の2室を開いて利用する講堂に人がいっぱいになり、階段や廊下にまであふれた。」

風変わりな学校だったが、ここでの6年間は野上にとって心の揺籃期で、人間や世の中について考えることを教えてくれたという。寄宿生が大半だったが、野上は本郷にある叔父の家から4キロ半の道のりを徒歩で通った。普通科1年生に編入され、クラスは12名だった。授業は女学校卒業程度を基準にしており、野上は驚く。普通の教科書は用いられず、『枕草子』や『十八史略』など国文や漢文は原典で教えられた。英語もロングマン、アービング、ロングフェローなどの書物を読むのには途方にくれた。1週間に8時間も英語の授業があった。文法も英語で教わる。ただただ辞書にかじりつき英語と奮闘した。

別荘の部屋のような教室。勝海舟寄贈の武道場で行われる薙刀や剣術の授業。裁縫や料理のような女学校らしい科目はなかった。シェークスピアやカーライルを小脇にかかえて教室に入る高等科の上級生は、普通科の者からは特別な尊敬を払われていた。普通科も高等科もかなりレベルの高い授業内容であったことが窺える。

巌本は、『女学雑誌』に10ケ月にわたって毎号義捐金募集広告を出したり、音楽会や水彩画展覧会を開いたりして財源獲得に努力した。しかし、星野天知、北村透谷、若松賤子、島崎藤村らがいなくなり、郊外へ移転したことで、名士の授業の協力も得にくくなり、明治女学校の魅力は薄れていった。

日清戦争の前後からナショナリズムの傾向が強まり、日本のキリスト教界全体が圧迫を受けた。28年1月29日「高等女学校規程」が制定され、32年2月8日「高等女学校令」が公布された。「本令ニ依ラサル学校ハ高等女学校ト称スルコトヲ得ス」の条項があった。続いて設備、学科、教員等の施行規則が制定された。各県立の高等女学校は県の最高峰として人気が集まった。私立でも三輪田女学校や淑徳女学校など「高等女学校令」に準拠して、認可を受ける女学校が増えていった。「訓令12号」によりキリスト教主義女学校は、宗教教授やミサを棄てなければ高等女学校としての認可を得ることができなくなった。認可を得られなければ各種学校の地位に甘んじなければならなかった。

明治女学校は「高等女学校令」に準拠しないで、それまでの路線を貫いた。33年に女子英学塾が津田梅子によって、34年に日本女子大学校が成瀬仁蔵によって創立され、女子の高等教育が胎動し始めた。36年3月27日「専門学校令」が公布され、日本女子大学校は37年4月、女子英学塾は9月に認可を受けた。明治女学校の普通科卒業生も、本来なら高等科へ進む生徒が他校へと流れ、高等教育を志す者は最初から専門課程を持つ学校に入る場合が多くなった。

33年3月10日、治安警察法が公布された。『女学雑誌』508号（33年3月25日）に掲載した田中正造の「鉱毒文学」が政府の忌諱にふれた。雑誌は没収され、巌本は新聞条例違反として告訴された。この後しばしば『女学雑誌』は休刊となる。36年末、巌本は18年間思想を発表してきた『女学雑誌』の編集を青柳有美に委ねた。しかし、526号（37年2月15日）の後、刊行を見なかった。事実上の

廃刊である。明治女学校の宣伝機関誌『女学雑誌』が廃刊に追い込まれると、明治女学校も命を長らえることはできなかった。

時代の変転や三度の移転に伴う財政の圧迫に屈した面もあるが、明治女学校衰退の原因の一つに、巌本の女性関係の悪評があった。賤子の死後も、巌本は賤子が生きているかのように壁の写真に向かって語りかけている。それゆえ再婚しないのだというロマンティックな物語が寄宿舎に伝えられていた。その一方で、子供たちの世話をさせていた賤子の妹、女性教師や女生徒、夫の西洋留学中に聴講生となった大塚楠緒子らとの噂が絶えなかった。相馬黒光が自伝『黙移』で巌本の「男性的なあらゆる美を備えた姿が不幸の原因になった」と記したのはこういうことであろう。

37年4月、巌本は校長を辞任して校主となり、7月呉久美が校長となった。同時期に巌本が「内外調査通信社」創設にあたって多額の借金をしていた。土地所有者が巌本の名義から他人名義に書き換えられた部分がかなりあった。これも巌本退陣の理由になったのであろう。

巌本は明治女学校を女子大学の地位に到達させるという目標をうたいながら実現できなかった。しかし、明治女学校高等科の授業は確かに、高等教育を意識したものであった。その意味から明治女学校は明治後期に興った女子の専門学校のさきがけと言えよう。三宅花圃、羽仁もと子、山室機恵子（旧姓佐藤きえ、28年高等科卒業、救世軍等の社会事業家）、相馬黒光、野上弥生子ら多くの優秀な人材が育った明治女学校は、明治41年12月25日に最後の卒業式を行い、在学生は精華女学校に委託し、23年の歴史に終止符を打った。

参考文献

青山なを著『明治女学校の研究』

『学制百年史』（文部科学省）

内田糺・森隆夫編『学校の歴史』第３巻・第４巻

『女学雑誌』

相馬黒光著『黙移』

野上弥生子著『森』

藤田美実著『明治女学校の世界』

教育史研究の周辺⑫
学校を経由した社会移動研究（再生産戦略編④）

加藤（かとう）　善子（よしこ）（信州大学）

実業層の再生産戦略

近代における実業の世界は、経営や生産手法の近代化や大量生産への移行、流通経路の変化と拡大、海外市場への展開など、劇的な変化を経験していながら、学校利用や社会移動の研究において注目されることは少ない。井上好人（2005）「明治期商工業層とその子女の高等女学校進学の相関関係」[1]は、実業層に注目した貴重な研究であるが、石川県の第一高等女学校に在籍していた生徒と、石川県金沢市の商工業層を分析し、その生徒の親の事業経営のタイプを明らかにしたものである。対象時期は明治30～40年代で、第一に「家内労働に依存した零細経営の減少と労働力を雇用する形態の増加」、第二に「商品の流行と多様化に対応するための積極投資型経営へのシフト」、第三に「これらの対応を巧みに進めより繁盛していく商店と反対に没落していく商店の二極分化」が、この時期の経営の特徴であるとする[2]。激動の時代の中にあって、実業層にとっても生き残りは切実な問題であったはずで、「従来の静的でステレオタイプ的な商家のイメージを批判的に検討」し[3]、再生産研究の俎上に載せる試みは、教育史研究にとっても大きな意義のあることである。

実業層子女の女学校進学機会と進学動機

ここで使われている資料は、第一に『日本全国商工人名録』所収の「金沢市商工人名」（1898）、第二に『商工人名録』（金沢商工

会議所、1911）、第三に県立第一高等女学校の『学籍簿』『学級台帳』である[4]。

結論として、明治30年代以降の金沢において、もっとも高等女学校への進学に積極的であった商工業層は、「藩政期から城下町に店舗を構えてきた富裕な老舗で、比較的大きな事業規模を誇りつつもその資産のわりには投資に控えめであった『資産家タイプ』」であった。一方で、地方から金沢に出て事業を起こしたか移した新興の商工業層では、高女進学機会は少ない。そしてここが興味深いところなのだが、「分限を越えて早急な事業拡大を狙う『投資家タイプ』」は、それほど高等女学校への進学に積極的ではなかった[5]。この一連の分析を踏まえて井上は、学校進学への「動機や目的が必ずしも支配的な教育思潮（例えば良妻賢母思想）に呼応したものであったわけではない」という点を改めて強調している[6]。たとえば、成り上がりの実業家が、娘に学歴をつけさせて、婚姻・養子戦略を展開した、という現象は、すくなくとも金沢の県立女学校では見られない。一方で、仮に中学校進学者について同様の分析がなされたら、新興実業家の息子の進学についても同様に控えめな傾向が果たして見られただろうかと想像が膨らむ。

進学行動とそれによる各階層の再生産戦略は、その地域の人口動態と産業構造によって規定されると私は考えている[7]。これまでに学校利用による社会移動研究の対象となったのは、主に小規模地方都市であり、中等教育を経由して優秀な人材が中央に吸い上げられ、士族から平民へ、公務自由業から実業層へと学校利用が広がっていくというイメージが出来上がっているが、たとえば、土着の士族がほとんどいない地域や、そのため必然的に公務自由業の人口が少ない地域などにおいて、また大規模近代都市においては、違うパターンが見られるはずである。その点で、この井上（2005）の

研究は、江戸時代から豊かな大都市であり「近代以降も北陸地方の産業・行政の中核都市」でもあった金沢という規模の大きい都市を扱っている点と、衰退していた伝統産業が維新後に輸出産業となって再興され、清酒・味噌・醤油などの業種も近代以降の成長産業であった点などが踏まえられており[8]、非常に興味深い。ただ、実業層の進学行動に関する研究は、資料的制限や、おそらく適したアプローチの未発達という点においては十分な分析は未だになされていないと感じられる。今後の伸びしろの大きい領域である。

注

———————————————————————————

1　井上好人（2005）「明治期商工業層とその子女の高等女学校進学の相関関係―石川県立第一高等女学校の事例による仮説―」『ソシオロジ』第50巻 第2号, pp.37-51.

2　前掲論文, p.38.

3　前掲論文, p.38.

4　前掲論文, pp.40-41.

5　前掲論文, pp.48-49.

6　前掲論文, pp.49.

7　加藤善子（2011）「近代日本における都市中学校生徒の社会的出自：旧制兵庫県立第一神戸中学校の学籍データによる分析」『信州大学人文社会科学研究』第5号, pp.175-189.

8　井上好人（2006）「近代日本の『流動エリート』と郷友会ネットワーク―加越能郷友会の事例―」『教育社会学研究』第78集, pp.208.

カレッジノベルの研究への道（5）
：日本の研究に見るカレッジノベル（1）

吉野（よしの）　剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号からは、日本における研究の状況を概観する。日本のカレッジノベルを研究していくにあたり、どのような観点から進めていくべきかについて検討する。

2011 年の大学史研究セミナーにおけるカレッジノベルに関するシンポジウムでは、日本のカレッジノベルの事例として、夏目漱石の『三四郎』と『こゝろ』、久米正雄の『学生時代』に収録された「競漕」と「受験生の手記」の 4 作品を取り上げた。これらの作品を概観して、以下のような特徴と問題点を提起した。

これらの小説は、概して「うぶ」な青年が女性に翻弄されつつ、「大人の階段」を上るという構図を取るということである。しかし、この種の学生がどの程度典型的と言えるのかは微妙である。

一方で、色事には目もくれず、真面目に授業に出て首尾よく卒業した人間を主人公にした小説はありうるのだろうか。書くことは可能でも、それが公開に資するものになるかは別問題である。そのような小説があまりにもつまらないのだとしたら、現実問題としてそういう小説は存在しない（売り物になっていない）ということである。

また、「うぶ」な青年が大人の階段を上るだけならば、大学生に主人公を限定する必要はない。進学率を勘案すれば、読者の大半は「大学」を知らない人なのであって、そういう読者には大学や大学生はどのように映るのかという疑問も生じる。そのような小説が広く読まれているという実態からは、知らない世界であるがゆえに面白いと評されたと考えるしかない。ただし、共感されたのか、あるいは珍

重されたのかは不明である。

典型的な構図と関連して、事例に選んだ小説における女性の位置づけも問題である。端的に言って、女性は「コケティッシュ」なものとして描かれている。「うぶ」な青年にとって女性はそのような存在であるといえばそれまでであるが、言ってしまえば女性は小説を彩る「添え物」でしかない。当時の大学生は基本的に男子と考えてよいが、一方で女性を主人公にしたときに『三四郎』のような小説は書けるのかという問題が浮かび上がる。つまり、高等師範学校や専門学校（これらが当時の女子にとっての最高学府である）に入学した「うぶ」な女性が男に翻弄されつつ、「大人の階段」を上るという構図はありうるのかということである。

これらの小説は、青年期に通底している（？）「煩悶」がそのテーマである。しかし、先述の通り「煩悶」は大学生独自のものではない。カレッジノベルにおいて「煩悶」以外のテーマはいかにして成り立つのだろうか。久米正雄の「競漕」は、事例に取り上げたものの中で「煩悶」をテーマとしない数少ない例外ではあるが、端的に言って面白い小説ではない。

実のところ、「煩悶」以外のことがこれらの小説に描かれていないわけではない。たとえば、『三四郎』では広田先生の招致計画についても触れられてもいる。しかし、それが小説の主たる筋とはいえない。また、事例からは外れるが、山崎豊子の『白い巨塔』では財前の昇任人事が重要な問題として描かれているわけで、「煩悶」以外の主題は存在しうるということにはなる。

とはいえ、繰り返しになるが、売り物にならない小説は日の目を見ることはほぼないといってよい。その意味では、「煩悶」が読者によって求められていたと結論づけるのが、現段階で最も妥当な結論で

ある。その上で、作家が「煩悶」を描こうとするならば、職に就かず悶々としていても生活が成り立つ有閑階級としての学生という主人公を設定すると描きやすいということなのであろう。

なお、シンポジウムで取り上げた 4 つの小説については、後の号でもう少し詳細に検討する予定である。

ところで、文学研究以外の分野において、文学作品を史料とした研究も多くはないように思われる。少なくとも、教育史において多いとはいえない。それは、第 52 号で取り上げたアメリカの先行研究でも指摘されていたが、資料としての不安定さの問題が関わっていることは言うまでもないだろう。

教育学において文学作品に積極的にアプローチしているのは、教育社会学である。竹内洋は、文学作品を話題の契機にしている。また、作家たちと高等教育との関係を検討した山内乾史の研究もある(『文芸エリートの研究―その社会的構成と高等教育』(有精堂出版,1995))。とはいえ、これらの研究も作品そのものに焦点を当てているわけではない。

大学や文学作品とは少し離れるが、マンガにおける教師像を分析した山田浩之の研究がある(『マンガが語る教師像―教育社会学が読み解く熱血のゆくえ』(昭和堂,2004))。ここでは個々のマンガの分析もされており、示唆に富む。

山田の研究をふまえれば、日本におけるカレッジノベルについての研究を進めるにあたっては、まずは作品そのものに焦点を当てる必要がある。すなわち、そのような蓄積があることが十分に見込まれる文学研究の状況を検討することが必要である。次号ではその点について検討していくことにしたい。

戦後生徒会活動成立史の研究 ①
―なぜ生徒会活動史を扱うか―

猪股（いのまた）　大輝（だいき）（東京大学大学院）

シティズンシップ教育研究において教育史的方法をとる意義

2015年の選挙権年齢引き下げと前後して、我が国においてもシティズンシップ教育に関する議論が盛んに交わされるようになった。こうした時代状況を念頭におく形で、平成30年公示の新高等学習指導要領では、「中，高等学校においては，生徒一人一人に社会で求められる資質・能力を育み，生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくことが，これまで以上に重要となっている」[1]と述べられるなど、その必要性が繰り返し強調されている。

しかし、シティズンシップ教育に関する教育学的研究の側面に着目すると、その蓄積は十分とは言えず、特に日本教育史的な視角にたった研究は著しく不足していると言わざるを得ない[2]。わずかに存在する先行研究として、小玉重夫が著書『教育政治学を拓く』において展開する「戦後教育の脱政治化」論[3]をあげることができるが、小玉の研究は「政治化－脱政治化」をキーワードとした新たな戦後教育史観を示すことで、「シティズンシップ教育」に戦後教育史的な位置づけを与えることを試みるという萌芽的な段階に留まっており、小玉の議論の実証的な検証を含む、継続的な研究が俟たれている状況にある。

また、シティズンシップ教育を教育史的視角から検討する意義は、上述のような、先行研究の不足状況にのみ依るのではない。むしろ、より本質的な意義は、シティズンシップ教育のさらなる発展のためにも、ぜひとも歴史が顧みられねばならない、という点にある。なぜか。それは、今日のシティズンシップ教育を巡る議論と類似した多く

の議論が、過去－特に戦後新教育期－において繰り返されてきたことを確認できるからであり、それらを反省的に顧みずして、「新たな」教育を語るべきではない、と考えるからである。こうした議論の具体例については、今後の各号において確認することになると思われるが、例えば、1949年に「中学校教育全般について、中学校教育のあり方を説明し、中学校経営の指針として役立つことを期待して」[4]、文部省から発刊された『新しい中学校の手引』では、教育の目的について、次のように述べられている。

> 日本が民主的で、しかも文化的な国家・社会を建設し、世界の平和と人類の福祉とに貢献するためには、根本において教育の力にまたねばならない。このような教育の目的は、文化的民主社会の形成者を養成することである。民主社会の形成者は、またよき市民でもあるから、教育の目的はよき市民の育成であるとも云える。[5]

このような、今日でいうところの「シティズンシップ教育」的な意図を多分に打ち出していた教育論は、いかなる歴史的社会的背景において語られ、どのような教育政策・内容・方法・実践が行われたのだろうか。これらの点を検討することは、今日のシティズンシップ教育をよりよく理解するために、ぜひとも必要な研究であると考えられる。

なぜ生徒会活動を扱うか

筆者は、以上のような問題意識に基づいて、シティズンシップ教育の日本教育史的研究を志す。この研究において、筆者が特に注目するのが「生徒会活動」である。なぜか。これには2つの理由があ

る。

1つ目にあげられるのは、生徒会活動が、戦後民主主義社会における公民育成のために新たに導入された教育方法でありながら、導入当初から形骸化が報告され、その傾向が現代に至るまで続いてきた活動である、という点にある[6]。生徒会活動が、どのような理念のもと導入され、いかに実践されてきたのか、その理念や実践に歴史的/地域的な要因がどのように関係していたかなどを検討することは、生徒会活動がもつ上述の歴史的特性と合わせて鑑みると、その時々、場所ごとのシティズンシップ教育論を分析することにつながると同時に、そうして語られる教育論の陥穽を検討することにもつながると考えられる。この意味で、シティズンシップ教育の史的研究として、生徒会活動は、好適な対象である。

2つ目にあげられるのは、先行研究の不足である。上述したように、生徒会活動研究は、重要な意義を持っていると考えられるにも関わらず、先行研究の段階は限定的な水準に留まっていると言わざるを得ない。例えば、次号以降確認していく成立期の先行研究として、喜多明人による神奈川県の県立高校を対象とした生徒自治会成立史研究[7]や、冨岡勝による京都府公立高校を対象とした生徒会成立史研究[8]などいくつかを指摘できるが、これらの研究は、学校新聞やヒアリングなどの史料をもとにミクロな実践史を中心としつつ、それらを文部省著作物の記述と照らしあわせて検討したものが主で、CIE文書や地方軍政部資料などを用いて、より具体的な政策的状況を含みこんで記述した研究は、管見の限り存在しない。生徒会成立期の歴史の全体像を捉え、上述の考察につなげるためには、後者の不足している研究をぜひとも進める必要があるといえる。

以上のような問題関心のもとに、筆者は、生徒会の史的研究を進めていく。次号以降では、こうした研究の嚆矢として戦後新教育期

における生徒会の成立史を扱っていくことを予定している。

注

———————————————————————————

[1] 文部省（2018）『高等学校学習指導要領（平成30年公示）解説 総則編』, pp.3-4.

[2] 試みに教育史学会が発行している機関誌『日本の教育史学』において「シティズンシップ教育」・「市民性教育」などの単語を検索してみたが、上述の意図を持った論文は発見できなかった。また、CiNiiなどの論文検索サイトを用いて検索してみても、シティズンシップ教育的実践報告や、英国を始めとした各国のシティズンシップ教育実践の紹介などが主で、日本教育史的視座にたった研究は確認できなかった。

[3] 小玉重夫（2016）『教育政治学を拓くー18歳選挙権の時代を見すえて』勁草書房.

[4] 文部省学校教育局編(1949)『新しい中学校の手引』, 明治図書, p.1.

[5] 前掲書, p.187.

[6] 以上の記述の実証的検討は次号以降で行う。

[7] 喜多明人(1996),「戦後日本における生徒自治会の形成と意義ー神奈川県の学校史を中心に」, 喜多明人・坪井由美・林量俶・横山均編,『子どもの参加の権利ー〈市民としての子ども〉と権利条約』,三省堂,pp.145-161.

[8] 冨岡勝(2006),「生徒会の発足」,小山静子・菅井凰展・山口和宏編,『戦後公教育の成立ー京都における中等教育』,世織書房, pp.217-244,383-387.

学生・生徒「自 治」の教育史研究で何をやりたいのか

冨岡（とみおか）　勝（まさる）（近畿大学）

しばらく、勤務先の教職課程の授業のことを続けて書いていた。そろそろ旧制大学・旧制高校・旧制中学校の学生・生徒自治の話題で書きたい。ちょうど6月2日の「ニューズレター・コロキウム」で冨岡の生徒自治研究を取り上げてもらえることになったので、当日、みなさんから意見をもらう前に、これまでやってきた研究を振り返り、現時点での簡単な見取り図を描いてみたい。以下、いくつかのテーマに分けてこれまで取り組んできた主な研究を挙げながら、今後の展望を簡単にメモしてみた。

なお、本稿でも学生・生徒「自治」と、自治にカッコを付けているが、自治について調べれば調べるほど、意味が多様であることが分かり、簡単に意味を決めることが困難となってきたため、当面の間、カッコを付けている。どうやら、時代や各学校の状況によって変化しながら重層的に存在する学生・生徒「自治」の多様な在り方を見通し良く整理していくことが、筆者の研究のポイントなのかもしれない。

テーマI　旧制大学の学生「自治」

Ⅰ-1　冨岡勝「京都帝国大学における寄宿舎「自治」の成立とその変化」、1995年10月、教育史学会『日本の教育史学』第38集(pp.116-134)

Ⅰ-2　冨岡勝「学生団体「自彊会」による京都帝国大学の校風改革運動」、2004年2月京都大学大学文書館『京都大学大学文書館研究紀要』(pp.55-75)

Ⅰ-3　冨岡勝「京都帝国大学創立期における寄宿舎像の模索」『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』第46号

このテーマⅠは卒業論文以来の私の研究の出発点である。1980年代京都大学吉田寮に在寮して体験した「自治」が、京都大学創設時の寄宿舎生活とどのような関係にあるのか歴史的に明らかにしたいと思ってこの研究を始めた。現在は、異なる立場、異なる時代経験をもつ学生・教員・市民にとっての学生「自治」の可能性を切り拓くことに貢献したいと、ライフワークのように考え始めている。

Ⅰ-1では学生の風紀を心配しながらも、学生を大人として扱って自学自習の教育方針を採りたい京都帝国大学初代総長木下広次が、寄宿舎について何を考えていたのかを掘り起こしていった。Ⅰ-2とⅠ-3では、木下総長の寄宿舎方針が、実は寄宿舎や校風改革を目指した学生団体「自彊会」の動きと連動しながら具体化されていった可能性を指摘した。では「自彊会」に集まった学生たちはなぜ寄宿舎や校風改革を求めたのか、それについては彼らが経験した旧制高等学校における生徒「自治」について明らかにする必要があるだろう。そのため、テーマⅡにも取り組んでいる。

テーマⅡ　旧制高校の寄宿舎や校友会活動での生徒「自治」

Ⅱ-1　冨岡勝「旧制高校における寄宿舎と「校友会」の形成 ― 木下広次（一高校長）を中心に ―」単著 1994年3月 京都大学教育学部『京都大学教育学部紀要』第40号（pp,237-246）

Ⅱ-2　冨岡勝「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討（その一）―木下広次赴任以前―」、単著、2009年10月、『1880年代教育史研究年報』第1号(pp.85-105）

Ⅱ-3　冨岡勝「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討（その二）―木下広次教頭就任の背景と就任当

初の方針―」、単著、2010年10月、『1880年代教育史研究年報』第2号(pp.55-82)

Ⅱ-4　冨岡勝「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討(その三)―皆寄宿舎方針への文部省の対応とその背景―」、単著、2011年10月、『1880年代教育史研究年報』第3号(pp.101-115)

Ⅱ-5　冨岡勝「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討(その四)―寄宿舎自治制案の登場・検討と自治制導入―」、単著、2012年10月、『1880年代教育史研究年報』第4号(pp.79-127)

Ⅱ-6　冨岡勝「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討(その五)―寄宿舎自治制度導入過程から見えてくること―」、単著、2013年10月、『1880年代教育史研究年報』第5号(pp.83-107)

Ⅱ-2～Ⅱ-6では、東京大学駒場博物館に所蔵されている木下広次の一高在職時代の史料を主に使いながら、旧制高等学校の寄宿舎「自治」の代表格とされる一高の寄宿舎「自治」の導入過程を詳細に追った。ここを通して見えてきたものは、一高の寄宿舎「自治」制が、校長であった木下広次が当初からの教育プランとして考えていて導入したものではなかったことである。自由を求めながらも一定の「自治」機構をつくろうとする生徒たちの動きと、将来の国家的エリートとしての自覚にもとづいたモラルの形成は一方的な押しつけでは難しいと考えていた木下校長の模索が合わさった一つの結果として寄宿舎「自治」制が導入されたことが明らかになってきた。

一高で寄宿舎「自治」が導入された1890年は自由民権運動期の「自由」の類似語として使われていた「自治」と、明治期憲法体制下での国家を支える地方「自治」のイメージが混在していた時期である。森有礼から一高の風紀の立て直しを依頼されて校長に就任した木下広次は、生徒たちに「青年」と呼びかけながら生徒の動きに

対応しながら新たな「自治」 像をつくっていき、それが他校にも広がっていったのかもしれない。

テーマⅢ　旧制中学の校友会活動における生徒「自治」

Ⅲ-1　冨岡勝「尋常中学校の校友会成立に関する検討課題と方法」、2005年3月、近畿大学教職教育部『教育論叢』第16巻第2号(pp.35-49)

Ⅲ-2　冨岡勝「東京府尋常中学校における校友会の成立」、2008年5月、中等教育史研究会『中等教育史研究』第15号(pp.1-15)

Ⅲ-3　冨岡勝「校友会雑誌から見る明治中期・大正期・昭和初期における旧制中学校の校友会　―東京府立第一中学校と長野県松本中学校を中心に―」、教育史学会第58回大会研究発表、2014年10月4日

Ⅲ-4　「どんなことが『自治ではない』とみなされたのか」(1)～(8)、『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』第3号～第10号、松本中学校関係

Ⅲ-5　「どんなことが『自治ではない』とみなされたのか」(9)～(25)、『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』第11号～第27号、東京府尋常中学校関係

Ⅲ-6　「教育における自治」(1)～(14)、第28号、第30号～第36号、第39号～第45号

Ⅲ-2で考察した東京府尋常中学校の明治期の校長勝浦鞆雄や大正期の川田正澂校長(Ⅲ-5)からは、比較的明確な「自治」観が読み取れた。しかしⅢ-3とⅢ-4で、「自治」の伝統が現在も続く松本中学を調べたところ、松本中学での明治期以来「自治」観は実ははっきりしない。

当初は東京府尋常中学校学友会の事例が他の尋常中学校の校友会組織設立にも影響を与えた可能性についても考えたが、異なる特色をもった中学校についても今後検討しなければ何とも言えない状況である。今回のニューズレター・コロキウムの主要な話題の一つになるだろう。

テーマⅣ　木下広次研究

Ⅳ-1　冨岡勝「史料紹介　木下広次の「在仏雑記」と木下助之宛書簡（1876年7月22日）、単著、2012年11月、『近畿大学教育論叢』第24巻第1号（pp.59-74）
Ⅳ-2　冨岡勝「木下広次と一高歴史画」（1）（2）、『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』第1号・第2号

テーマⅡ のところで述べたように、木下広次は一高においても京都帝国大学においても、一人で生徒や学生の「自治」方針を立案・実施した訳ではない。しかし、一高の寄宿舎「自治」導入、校友会発足、京都帝国大学寄宿舎での「切磋団体」としての「自治」導入において木下が校長、総長として関与したことは見逃せない。また、1888年の一高教頭就任時の演説は、自由民権運動期から明治憲法体制への移行期において、「自治」を明言しないものの新たな教育像を描こうとしたものとして注目される。京都帝国大学初代総長として「細大注入主義」をとらず学生に「自重自敬」を求める方針を出したことも注目される。木下が帝国大学や旧制高校の教育について何を考え、どのような役割を果たしたのか、ということは近代教育史のなかで重要なのではないかと考え、評伝にまとめていく作業に従事している。

評伝では例えば、「木下広次を育てた環境とフランス留学」（実父である木下犀潭の学問塾のことなども）、「東京大学・帝国大学教授としての木下」（明治16年事件への対応のことも）、「第一高等中

学校校長としての木下」（教頭就任演説、寄宿舎「自治」制導入、倫理科授業、歴史絵画など）、「文部省専門学務局長としての木下」（井上毅文部大臣の教育政策と専門学務局長としての木下など）、「京都帝国大学初代総長としての木下」（初代総長としての活動、運動会と寄宿舎にみる「自重自敬」方針、教育界での発言など）について述べていきたい。

テーマⅤ　戦後の生徒新制高等学校の生徒会

Ⅴ-1　冨岡勝「新制高校における「生徒会」の成立　－ 京都市立洛陽高等学校および京都府立鴨沂高等学校を中心に －」　単著 1998年3月　立命館大学教育科学研究所『立命館大学教育科学研究所プロジェクト「京都「新教育」50年報告書」』(pp.89-110)

Ⅴ-2　冨岡勝「第6章　生徒会の発足」（『戦後公教育の成立－京都における中等教育－』共著 2005年3月　発　行所：世織書房、小山静子・菅井凰展・山口和宏編、pp.347-379、所収）

戦後の生徒会活動などでの「自治」には、また新たな要素が入ってきている。重層性に注目しながらも、新たな要素を実態に即して明らかにしていく作業が未来の「自治」を展望する上でも必要であると考えている。

同様な意味で、京都大学吉田寮の戦後史も取り組んでいきたいテーマである。

当面の優先順位としては、第1にテーマⅣの木下広次評伝、第2に状況からみて急務となっている吉田寮通史（テーマⅠ とⅤ）、並行してテーマⅢに取り組み、「近代日本における学生「自治」の重層性（仮題）」についてまとめていくことだろうか。

教育史研究のための大学アーカイブズガイド（18）

―全国大学史資料協議会 HP「大学史資料所蔵機関紹介」―

田中（たなか）　智子（さとこ）（早稲田大学大学史資料センター）

今号では番外編として、今月全国大学史資料協議会ホームページに新設された「大学史資料所蔵機関紹介」ページを取り上げる。全国大学史資料協議会とは「大学史に関する情報交換と研究、並びに会員相互の質的向上と交流をはかることを目的と」して1996年に設立されたもので、2018年10月現在、機関会員102機関、個人会員43名[1]を有する大学アーカイブズの連合組織である。

以下、（1）その「大学史資料所蔵機関紹介」ページの内容を紹介しつつ、（2）そこに掲載されているデータをもとに、各機関の主な所蔵資料と点数について述べていく。

（1）「大学史資料所蔵機関紹介」ページの内容

全国大学史資料協議会ホームページ（http://www.universityarchives.jp/index.html）を開くと、左下に「大学史資料所蔵機関紹介」ページへの入口がある（次頁画像参照）。そこをクリックすると、五十音順で機関名の一覧が出てくる。ここに掲載されているのは、前掲の会員のうち、掲載を希望した77機関の紹介ページである。

機関名をクリックすると詳細ページが出てくるが、そのページ構成は、⑴ウェブサイトURL、⑵資料閲覧の可否、閲覧方法、⑶開設年、沿革、⑷設置の目的、⑸主な所蔵資料、⑹所蔵資料の点数、⑺所蔵資料目録の公開状況、⑻これまでの活動、⑼その他となっている。

全国大学史資料協議会

検索

トップページ / 大学史資料所蔵機関紹介

目次

- トップページ（お知らせ）
- 設立趣意・沿革
- これまでの活動
- 入会案内・お問い合わせ
- 規約
- 会員名簿
- 各種資料
- リンク

会員専用ページ

- ログイン

大学史資料
所蔵機関紹介

大学史資料所蔵機関紹介

全国の各大学には数多くの大学史関係資料が整理・保管されておりますが、その保管先の機関名称は大学によって異なります。ここでは、当協議会会員校の中で了承を得た大学史資料の所蔵機関について紹介いたします。

[あ行]

愛知医科大学アーカイブズ（東）
青山学院資料センター（東）
追手門学院大学学院志研究室（西）
大阪商業大学（学校法人谷岡学園　学園資料室）（西）
大阪女学院 教育研究センター（西）
大阪市立大学大学史資料室（西）
大阪大学アーカイブズ（西）
大谷大学真宗総合研究所大谷大学史資料室（西）
お茶の水女子大学歴史資料館（東）

[か行]

神奈川大学資料編纂室（東）
関西大学年史編纂室（西）
関西学院 学院史編纂室（大学博物館）（西）
九州大学大学文書館（西）
京都産業大学大学史編纂室・京都産業大学大学史編纂事務室（西）
京都大学大学文書館（東）
近畿大学建学史料室・不倒館 - 創設者 世耕弘一記念室（西）

（上）「大学史資料所蔵機関紹介」ページトップ

（下）各機関詳細ページ

全国大学史資料協議会

検索

トップページ / 大学史資料所蔵機関紹介 / 早稲田大学大学史資料センター

目次

- トップページ（お知らせ）
- 設立趣意・沿革
- これまでの活動
- 入会案内・お問い合わせ
- 規約
- 会員名簿
- 各種資料
- リンク

会員専用ページ

- ログイン

大学史資料
所蔵機関紹介

大学史資料所蔵機関紹介：早稲田大学大学史資料センター

早稲田大学大学史資料センター
Waseda University Archives

〒202-0021　東京都西東京市東伏見3-4-1
東伏見STEP22　5階
TEL: 042-451-1343／FAX: 042-451-1347
E-mail: archives [at] list.waseda.jp

※ [at] を @ に変えてください。

1. ウェブサイトURL	https://www.waseda.jp/（早稲田大学公式ホームページ） https://www.waseda.jp/culture/archives/（大学史資料センターホームページ） https://archive.waseda.jp/archive/（早稲田大学文化資源データベース）
2. 資料閲覧の可否・閲覧方法	大学史資料センターホームページ「データベース」および早稲田大学文化資源データベース上で一部公開 所蔵資料の閲覧、画像利用等については大学史資料センターホームページ「利用案内」を参照
3. 開設年・沿革	1961（昭和36）年　図書館に校史資料係設置 1963（昭和38）年　校史資料室に改組 1970（昭和45）年　大学史編集所に改組 1998（平成10）年　大学史資料センターに改組
4. 設置の目的	本大学の歴史、創設者大隈重信および関係者の事蹟を明らかにし、これを将来に伝承するとともに、比較大学史研究を通じて、本大学の発展に資する

以下、前掲⑸主な所蔵資料と、⑹所蔵資料の点数の欄に記載されたデータをもとに、各機関がどのような資料をどのくらい保有しているか、若干の分析を試みる。

（2）主な所蔵資料と点数

まず⑸主な所蔵資料について、最も多いのは「学内刊行物」で、77機関中42機関が所蔵していると記載している。学内刊行物の主なものとしては、広報誌や校友会誌、各学部・研究所等の紀要・ニューズレターなどがあげられる。こういった刊行物は無論一次資料ではないが、その時々の大学の動き、当該機関・箇所の活動を知るうえで重要な資料である。

二番目に多いのは、「学内非現用文書」と「卒業生（校友）寄贈資料」で、それぞれ38機関が所蔵していると記載している。学内非現用文書は、文字通り学内各箇所で非現用となった文書が移管されてきたものであるが、中には「全体教授会議事録」（神奈川大学）や「理事会・教授会議事録」（専修大学）など、学部や法人運営に関する文書を所蔵しているところもある。卒業生（校友）寄贈資料は、卒業アルバム、教科書・ノート類など多種多様であるが、前掲の法人文書等では見えてこない、大学教育や学生生活の実態が見られる貴重な資料である。

三番目に多いのは、「創立者（創設者）関係資料」で、30機関が所蔵していると記載している。これは同会の会員校の多くが私立大学（77機関中66機関、会員全体では93機関）であることが関係している。本ニューズレター第32号で述べた通り、私立大学アーカイブズの中には、設置目的に建学の精神を明らかにすることを挙げているところも多く、創立者（創設者）関係資料の収集や研究を主要な業務としているところも少なくないからである。

以上、主な所蔵資料について見てきたが、これらはあくまで各機関の自己申告に基づくデータであり、ここに書かれていないからといって必ずしも所蔵されていないわけではない。気になる資料がある場合は、是非各機関に問い合わせをしてほしい。

次に⑹所蔵資料の点数について見ていく。前掲77機関の所蔵資料の点数を表にまとめると、下表の通りになる。

点数	校数（2003年）※	校数（2019年）
0-9999	10(17.8%)	17(22.1%)
10000-19999	8(14.2%)	12(15.5%)
20000-29999	4(7.1%)	10(13.0%)
30000-39999	2(3.6%)	7(9.1%)
40000-49999	2(3.6%)	2(2.6%)
50000-59999	2(3.6%)	2(2.6%)
60000-69999	2(3.6%)	2(2.6%)
70000-79999	0(0%)	2(2.6%)
80000-89999	2(3.6%)	1(1.3%)
90000-99999	1(1.8%)	1(1.3%)
100000以上	3(5.4%)	4(5.2%)
記載なし	20(35.7%)	17(22.1%)
計	56(100%)	77(100%)

※全国大学史資料協議会（2005）5頁掲載の表をもとに筆者が再構成

これを全国大学史資料協議会東日本部会が2003年に会員校を対象に行ったアンケート調査の結果[2]と比較すると、依然として最も多いのは1万点未満であるが、2万点、3万点所蔵している機関の割合も増えてきている。また記載なし、つまり所蔵資料点数を把握できていない機関の割合も減っており、資料整理やデータベース化が進んだ成果であるといえる。

ただし、これらの数値には「データベース入力点数」、「未整理分は除く」などの但し書きがついている場合もあり、また簿冊単位か細目単位かなど数え方の違い（例：アルバム1冊を1点として数えるか、中身の写真を1点として数えるか）もあるので、参考程度に見ていただきたい。

以上、全国大学史資料協議会ホームページの「大学史資料所蔵機関紹介」ページと、そこに記載されている所蔵資料、点数のデータについて述べてきた。このページが開設されたことによって、各機関の所蔵資料や閲覧方法等が一覧で見られるようになり、利便性が大いに高まった。大学史研究を志す者にとっては、必見のページである。

全国大学史資料協議会HP「大学史資料所蔵機関紹介」
http://www.universityarchives.jp/institutes.html

（つづく）

1 「全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿」（2018年10月2日現在）、および「全国大学史資料協議会西日本部会会員名簿」（2018年10月10日現在）による。
2 詳細は、西山伸「「大学アーカイヴズ」の現状と今後」（全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』2005年、第1章）を参照のこと。

改題　体験的文献紹介(1)

―近世儒学史の文献―

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

これまで「我流・文献紹介」と題して「ダビット・モルレ―申報」にまつわる研究書と戦後の高等学校教育課程改訂にかかわる「米国教育使節団 報告書」から「学習指導要領」の改訂についての主要文献を紹介してきた。前者は明治10年代の教育制度改革についての私の研究体験の中から感得した重要文献であり、後者は1968年、日本私立中学高等学校連合会が灘尾文部大臣 に提出した「高等学校教育課程改訂に関する要望書」に主体的に関わった私の重要資料である。いずれも私自身が体験した研究の過程で、これは重要だと感じた文献である。よって以後、体験的文献紹介と改題する。

1951年4月、私は早稲田大学の新制大学院文学研究科教育学専修の第1期生になった。教育学の教授は文学部から引き続きの原田実先生、宮内庁書陵部編修官から来られた尾形裕康先生、東大教育学教室から移られた上村福幸先生の3人で、心理学の戸川幸男先生が教育学教授も兼ねるということであった。国立大学の大学院に先駆けて発足したため、早稲田大学の教育学をどのように組みたてるか明確な方針がなかったらしい。とりあえずこうしようと思ったのか、原田先生が西洋教育思想史、上村先生が西洋教育史、尾形先生が日本教育史を指導するということであった。上村先生はドイツ語の教材を用いると聞いたので敬遠し、原田先生と尾形先生の授業を受けることにし、教育学以外の授業は一科目だけなら修士課程修了 の単位に数えられるというので演劇学の河竹繁俊先生の日本演劇史を受講することにした。

原田先生の西洋教育思想史はわかり易かった。当時はジョンデューイを中心とするアメリカ教育の紹介が流行(はや)っていたが、それに至るルネッサンスから19世紀までのヨーロッパの教育思想家をあげながらの講義と演習であった。コメニュース、ルソー、カント、ペスタロッチ、フレーベル、ヘルバルトなどが印象に残っている。図書館で探せば、これらの類書はいくらでもあったから演習の発表でもさほど困らなかった。尾形先生の講義と演習には面食らった。第1年目の前半は山鹿素行、後半は細井平洲の教育事績と教育思想を調べよというものである。原田先生の西洋教育思想史と対(つい)に日本の儒者の教育思想史をやるのだなと思った。しかしそのやり方は全く違った。山鹿素行の場合、先生は素行のことは話さない。素行の「聖教要録」「中朝事実」「配所残筆」「山鹿語類」などの著述を示して、これを読んでこいと言う。あまたある素行の研究書もいくつか示すが、他人の研究書で素行を論じることは禁じた。あくまで素行の原典を読んで論じなければならなかった。先生はその原典を一等史料と呼んでいた。山鹿素行ははじめ朱子学を学んだが、長じて兵学を修め、次第に唐宋明の学問に不審を抱いて古学を創唱した学者である。その次第を何回か演習で発表し、夏休みに50枚ほどの原稿にまとめて提出したら、かろうじて合格と判定された。私はこの勉強で日本儒学の朱子学、陽明学、古学の違いがおぼろげながらわかった。それより重要なことは「山鹿語類」や「配所残筆」を手にして読んだこと、さらに近世儒者の書物が滝本誠一の『日本経済叢書』に多く収録されていることを知ったことである。研究上の宝の山はすぐ近くにあったのである。なお朱子学、陽明学、古学の違いを手取り早くわかるには井上哲次郎の『日本朱子学派之哲学』『日本陽明学派之哲学』『日本古学派之哲学』の三部作があり、その後、日本儒学の学派を徹底的に調査検討したものに笠井助治氏が1969年、吉川弘文館から出版した『近世藩校に於ける学統学派の研究』がある。以後この手の研究書はきかない。

さて、後期には課題として細井平洲が示された。細井平洲は尾張の農民の子であるが志をたて江戸の漢学塾で学び、自ら家塾嚶鳴館を開き諸生を教授し、米沢藩主・上杉鷹山に招かれて藩校興譲館を刷新した。また故郷尾張藩主・徳川宗睦の知遇を得て藩校明倫堂の督学になった、江戸中期の学者にして教育家である。例によって尾形先生は平洲著の「嚶鳴館遺草」「米沢学校相談書」を示されただけだから、あとは独学である。これらは『日本経済叢書』にあったから、これらの原典を読んで、あとは『日本教育史資料』第1冊にある「旧名古屋藩」「旧米沢藩」の藩校記事を調べた。私が『日本教育史資料』に接した最初である。私は藩校改革者としての細井平洲という視点で50枚ほどの論文を書いて提出した。私にとって藩校の教育の一端がわかっただけでも収穫であった。

第2年目前半の課題は『六諭衍義大意』であった。この書は時の将軍・徳川吉宗の命により朱子学派の儒者・室鳩巣が書いた庶民のための道徳書である。版を重ね、幕末まで江戸市中の寺子屋に配布された。「六諭」とは清の世祖が「孝順父母」以下6項の道徳を欽定したものである。それを程順則が実例をあげて解説した。それが「六諭衍義」である。これが日本にもたらされて将軍吉宗の目にとまった。吉宗は前代から続く堕落弊風を正そうと、これを道徳書にして配布しようと思ったが非常に長文である。そこでこのダイジェスト版をつくろうと思い、朱子学派の儒者・室鳩巣を呼んで、その和訳を命じたのである。

「六諭衍義大意」は『日本教育文庫・教科書』編にあったので全文筆写して(当時、コピー機はない)読んだが、面白くない。いろいろ考えた末、この本が成立するまでの経緯(いきさつ)を調べて書こうと思った。先ず徳川吉宗がなぜ、この書物の刊行を企てたか。これは吉宗の行動と事績を記した『徳川実紀』(国史大系本)の「有徳院殿御実紀」と『徳川禁令考』に当る。室鳩巣については『駿台雑話』(岩波文庫)は簡単に手に入ったが、「六諭衍義」に関する一等

史料は見当たらない。そのうち盟友青地兼山、青地麗沢に宛てた鳩巣の書簡『兼山麗沢秘策』が前掲の『日本経済叢書』に収録されていることを知った。この書について「衍義大意」執筆の箇所を筆写し、「徳川実紀」と合わせ読むと幕府の学問所内の争い、即ち林大学頭の凋落に代る木下順庵派(高倉屋敷講釈派)の台頭の中で木門派の室鳩巣が抜擢されたことがわかった。さらに古文辞学派の俊才・荻生徂徠が加わった儒学者の争いを将軍吉宗が上手にあしらって「六諭衍義大意」を完成させたこともわかった。これは「兼山麗沢秘策」を熟読したからである。これは面白いと思って「六諭衍義大意の成立」と題するレポートを提出して合格した。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

このたび、鈴木勇一郎さん（立教学院史資料センターのコーディネーター）が記した「立教のキャンパスとその立地について」『立教学院史研究』第16号（2019年、21～46頁）を読んでみました。「都市化と立教」といった視点から、立教の池袋移転や新座移転を取り上げていてなかなか興味深いなと感じました。とくに、戦後の大学史に興味をもつ私（谷本）としては、「戦後立教における新座移転問題」という項目に注目しました。鈴木氏によれば、新制高等学校として発足した立教高校が、1950年代以降に池袋校舎から、清瀬、新座、朝霞といった地域を具体的な移転候補として検討し始めていたといいます。こうしたなか、東武鉄道が東上線沿線の活性化をはかるうえで、用地取得に前向きであるという情報を得たそうです。1956年末には、東武鉄道と立教学院の首脳との話し合いによって、高校を含め大学の移転を視野に入れて、東上線沿線の校地を寄附する方向が示されます。1958年12月、立教学院と東武鉄道は「立教学院校舎移転に関する協定書」を締結し、高等学校と大学の一般教育部を新座に移転する方針で、それにともなう建設資金は東武鉄道が寄附するというかたちとされました。ところが、大学の新座移転はなかなかスムーズに進行しなかったといいます。そこで、鈴木氏が強調しているのは、「拡大路線を推進していた松下が総長を辞職したことに加え、その後大学紛争に巻き込まれていったことが大きく影響していたことは確かだろう」（42頁）とし、「高校だけが池袋を離れ、多くの私立大学が郊外キャンパスを設置する中、大学が池袋だけに留まり続けたことは、高度成長期以降の立教の特質を考える上では、重要な要素だと言えるだろう」（43頁）と指摘しています。そして現在では、また逆に都心回帰の現象で、高度成長期に郊外に移転していた大学の多くが都心部に大学施設を集約する潮流が生じています。やはり、キャンパス移転の意味合いについては、教育の効果や評価などと同じように、短期的な視点でもって性急に論じることは禁物でしょう。しかしながら、重要な問題であることは間違いないゆえ、教育者・研究者である我われとしても、つねに注視しながら案じておかねばならないと思います。（谷本）

吉田寮関係のことでお世話になったある方から、「面白い雑誌がありますよ」と、『園藝探偵　NO.3』（2018年10月、誠文堂新光社）をいただいた。「花と園芸の近・現代史がわかるフリーペーパー」というサブタイトルがついた雑誌で、価格0円だが、一般書店では入手困難な刊行物となっている（誠文堂新光社のWebサイトをよく見ると、会員登録することで入手できるらしい）。

「観菊会　井上馨の外交戦略」「東条英機首相のことば　バラを作っているときではない」「石川栄耀　焼土に描く都市計画」などの、歴史と園芸の接点を語る記事が掲載されている。記事はすべて松山誠氏の執筆によるもので、巻末の著者紹介によれば、松山氏は国立科学博物館に勤務したあと花の世界に入って「花業界の生きた歴史を調査する『花のクロノジスト』として活動中」という経歴の方だそうだ。

例えば「東条英機首相のことば　バラを作っているときではない」の記事では、1942年に東条英機首相が対米戦争必勝祈願のために伊勢神社に参拝した際、三重県明野農蚕学校を突然訪問し、校内のバラ園を見て、標題のような話をしたことを報道した新聞記事を探し出して詳しく紹介している。色々なものが歴史とつながっていることを実感できて、たしかに面白かった。参考文献一覧も付けられていて、学術的関心にも対応できる雑誌になっている。

（冨岡）

会員消息

内閣府による本年3月の発表で、中高年の引きこもりが61万人をこえ、引きこもり期間も、若くしてから長期化する傾向が顕著にみられる…などと報道され、社会的な波紋が広がりました。これを受けてか、本年4月の政府の経済財政諮問会議では、30～40代の引きこもり就労支援対策の集中プログラム（3年間）を早期実現するよう提言されました。少子高齢化を底流とする、生産労働力不足や医療費・年金等の公的支出の増大という逼迫した問題とかかわって、とても重大な現代の社会ニュースだと正直感じてしまいました。そんなニュースとも少なからず現実的に関連するのだろうかなどとつい思ってしまう、アニメ「ネト充のススメ」全10話（原作：漫画作品、2017年TV放映）ですが。30歳のある日、脱サラして引きこもりニートとなった主人公の女性は、好きなオンライン・ネットゲーム内で、戦士でイケメン男子を演じ、ゲーム活動し始めます。当初、主人公の女性は、「その辺の無職とは格が違う…自ら、ニートの道を選んだ“エリート・ニート”だ」と開き直って、現実世界ではコンビニと自宅の往復だけで、仮想のゲーム世界に埋没していましたが。さて、主人公を巡るお話はどのような展開をみせるでしょうか。また同様に、アニメ「ネトゲの嫁は女の子じゃないと思った？」全12話（原作：ライトノベル、2016年TV放映）では、男女高校生らが自らも通う高校に「現代通信電子遊戯部」（ネトゲ部）を設け、現実世界では不登校気味で、ゲーム中毒なある女子高生をなんとか更生させて、現実の高校生活を愉しく送らせたい…として、「リアルとゲームは別物だ」を旗印に悪戦苦闘します。ただ彼女は、筋金入りの対人恐怖症からなのか、今時なリア柔の若者らを激しく嫌悪していましたが。またアニメ「ReLIFE」全13話（原作：漫画作品、2016年TV放映）では、受験や就職、人間関係で挫折するなどして、遂には無職となってしまった主人公らの前に、彼らを社会復帰させるべく、実験新薬の力で一定期間だけ見た目を若返らせ、秘密実験として彼らに再度今時な高校生活を送らせようと斡旋するリライフ研究所職員が現れます。果てさて、これら作品の展開模様につきましては、実際に作品をじっくりご覧いただければ幸いです。もちろん、選択肢としての結末が期待されるようなハッピーエンド？に終わればいい…のかもしれませんが。いったい、どうなるでしょうか。（谷本）

一年間、連載を続けることができました。編集委員の冨岡さん、谷本さん、お誘いくださり、本当にありがとうございました。少し休んで、秋頃にまた戻ってきます。今度は例の科研で調べたことを、少しずつご報告できればと思っています。

（加藤善子）

最近、年度初めで各機関とも忙しいためか、取材をお願いしてもすぐには引き受けていただけないケースが連続し、原稿が書けず途方に暮れていました。そんな時、ちょうど全国大学史資料協議会の「大学史資料所蔵機関紹介」のページがリリースされましたので、今回ご紹介した次第です。そのページを見ていただければわかりますが、「大学史資料所蔵機関」といっても名称や形態が様々で（資料館・記念館・文書館・博物館等）、インターネット検索してもなかなか見つけにくいのが現状です。それが一覧で探せるというのは、かなり画期的なことであると思います。皆さま是非ご活用ください。（田中智子）

先日、古本市にて研究書籍を購入したのですが、以前購入した書籍で、本が手元に2冊あります。研究書籍もリスト化して整理しないといけないと感じた次第です・・・（雨宮）

7月末締め切りの論文提出まで、お休みをいただいております。申し訳ございません。現在、河合榮治郎の『教養文献解説』と格闘しております。またこの研究をこちらのニューズレターでも発表させていただけるよう、日々精進いたします。よろしくお願いいたします。（末松）

今号から参加させていただくことになりました。猪股大輝と申します。修士1年の若輩者ですが、精一杯執筆してまいります。未熟な点も多いかと思いますので、皆様のご指導のほど、よろしくお願いいたします。（猪股）

前号で紹介した『みんなで活かせる！学校資料　学校資料活用ハンドブック』（村野正景・和崎光太郎編。非売品）の執筆者の一人である八田友和さんがコラムを投稿してくださいました。学校資料を活用した新たな授業プランを考えてくださっています。このように、コラムは、レギュラー執筆者だけでなく読者の皆さんの投稿もお待ちしています。

また、毎年夏に開催されている旧制高等学校記念館（長野県松本市）の夏期教育セミナーが8月17日・18日に開催されます。本ニューズレター執筆者も多数参加しています。ぜひご参加ください。主な内容は以下の通りです。

8月17日（13時30分開始）

渡邉匡一さん（信州大学大学史資料センター長）

講演「近代教育資料の可能性と課題ー旧制松本高校を中心に」

記念イベント「思誠寮の青春ー旧制松本高校

～信州大学3世代の体験談を通じて」

夕方に懇親会（要予約）。

8月18日（9時25分開始）

研究発表1.冨田ゆりさん（学習院大学史料館）「旧制松本高等学校における辻邦生の創作 ― 日記「園生」および寮雑誌「思誠」を視座として」

研究発表2（共同研究発表）.谷本宗生さん（大東文化大学）「旧制高等学校の教育システムと教育方針 ー第四高等学校溝淵進馬と第二高等学校阿刀田令造を事例として」・田中智子さん（早稲田大学大学史資料センター）「第二高等学校および第四高等学校の学生生活・寮生活」（仮）

研究発表3（共同研究発表）.折茂克哉さん（東京大学駒場博物館助教）司会・田村隆さん（東京大学大学院総合文化研究科准教授）「明治30年代の一高」・丹羽みさとさん（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター）「狩野亨吉と旧制一高医学部」・川下俊文さん（東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程）「第二臨時教員養成所　― 一高における教員養成」

午後は、旧制高校OBによる記念館展示解説と研究情報交換会

宿泊申込みは8月2日まで。<http://matsu-haku.com/koutougakkou>

この夏期教育セミナーで発表される冨田ゆりさんから、学習院大学史料館で6月29日に開催される、「没後20年　辻邦生を語る」講演会の案内をいただきましたので、次頁で紹介いたします。奮ってご参加ください。（冨岡）

本ニューズレターＰＤＦファイルをダウンロードして印刷される際、Adobe Reader　などのソフトの「小冊子印刷」機能を利用して A4 サイズ両面刷りに設定すれば A5 サイズの小冊子ができます。

辻邦生を語る

没後20年

PartI 拝戸雅彦　キュレーター・美術史家/愛知県美術館企画業務課長
「二つの磁場から——名前で語る人と語らない人」

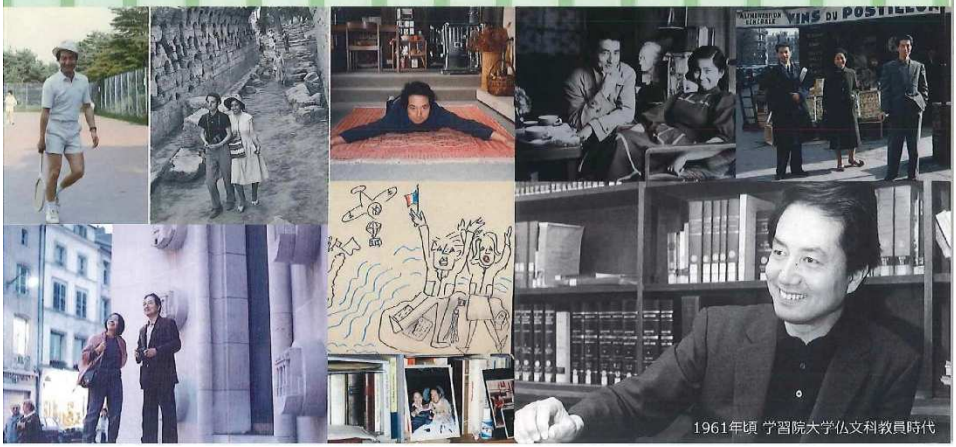
PartII 松浦寿輝　作家・詩人・批評家/東京大学名誉教授
「辻邦生——天性の小説家」

会場 学習院創立百周年記念会館
13:30-16:45（13:00開場）
※入場無料・事前申込不要

第89回学習院大学史料館講座
講演会

6.29 Sat.

主催 学習院大学史料館
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1173
辻邦生関係資料Twitter　kunio_mini
協力 中央公論新社　毎日新聞社



1961年頃 学習院大学仏文科教員時代